# 言語行動の東西差

## ―準備調査から傾向を探る―

篠崎晃一・中西太郎

### 1. はじめに―言語行動の地域差研究の意義

世間では一般に、どこそこの地域の人は「ユーモアがある」「おしゃべり」だ、どこそこの人は「あかぬけている」「冷たい」などといった言説が聞かれる。この手の言説の多さは、それぞれの地域の地域性への世間的な関心の高さを反映したものであり、こういった、地域イメージ（「ことば」に関して言えば「方言意識」）の調査、研究は盛んに行われてきた（社団法人大阪アドバタイジングエージェンシーズ協会 2006 など）。それぞれの地域イメージというのは、何らかの地域的特徴に支えられて形成されたものと考えられる。中でも「ユーモアがある」「おしゃべり」など、一部のイメージは、コミュニケーション上の特徴に関わるものであり、当然、日常的なコミュニケーションのあり方がイメージ形成に深く関わっている。しかし、なぜそういったイメージが生まれるのか、そのイメージを形成する何らかの言語的特徴がどのようなものかという点は、まだ実証的に解明されたとは言えない。むしろ、これらのイメージがどのような特徴によって形成されたのかという問題について、これまでの言語学の研究領域は十分貢献できていなかったとも言える。

それは、これらのイメージ形成の背景検証のための、言語研究上の着眼点や検証方法の未成熟、それに伴うデータ不足から地域差の背景となる理論構築が困難だったという事情もある。具体的に言えば、何を、どれほど、どのような方法で比べれば、地域ごとのイメージ形成につながる言語的特徴の実証につながるかが分からなかったということである。

筆者らは、こういったイメージ形成の大きな要因となる言語的特徴の一つが、言語行動の領域だと考える。言語行動の地域差の研究は、こういった世間一般が抱くイメージの形成がいかなる側面を以て規定されるかという問題の解明に貢献する可能性がある。

さらに、近年、言語行動に関わるレベル、すなわちことばの運用まで射程に入れた、方言区画の理論「言語的発想法の地域差」が提出された（小林・澤村 2014）。これは、冒頭に述べたようなイメージをも含む、我々が直観的に感じる日本語の地域差の形成の解明に取り組む理論と捉えられる。その内実の証明には、今後さらにきめ細やかな実証を積み重ねる必要があろうが、こういった理論が構築されてきた点を考えると、今や、言語行動の研究分野も、国内の地域差を明らかにするに足る視点を成熟させ、イメージ形成につながるような運用実態の地域差の解明の研究を行うべき段階に至ったと考えられる。むしろ、それどころか、言語行動の地域差の解明と記録は急務と言えるかもしれない。例えば、言語行動の一つであるあいさつ表現の近年の変遷は著しい。あいさつ表現に限らず未解明の言語行動の地域差は、生活様式などの変化、画一化により消滅の危機に瀕している可能性が高い。

本研究は、運用レベルの地域差の解明とその理論の構築という視座の下、全国的な地域差解明の足掛かりとなる調査を行い、方法論と視点を洗練し、言語行動の地域差を素描する。

## 2. 言語行動の地域差に関する先行研究

言語行動の地域差解明という目標を掲げたとき、従来の研究の大きな問題点の一つは、研究対象とされてきた言語行動の種類の偏りにあったと言える。

例えば、言語行動の研究の具体的な観点を決める構成要素には、会話参加者の性質や目的などがある。そのうち、会話参加者の性質に関わる観点での研究は、敬語行動、コードスイッチングなどの研究を通してこれまでに多くなされてきた。また、目的別の観点においても、各種のあいさつ場面や、方

表 1. 対人行動の類型（日本語記述文法研究会 2009: 289）

| | |
|---|---|
| 持ちかけ系 | 命令・禁止　依頼　勧め　助言・忠告<br>誘い　許可求め　申し出 |
| 応答系 | 承諾・許可　断り・不許可 |
| 調整系 | 感謝　謝罪 |

言研究の基盤となる共通語の言語行動研究で整えられた枠組み（日本語文法記述会 2009「対人行動の類型」、表 1）に沿った、依頼や感謝、謝罪などの研究は盛んであったと言える。

しかし、これらの観点で切り取られた対象の考察を通して見える特徴は、あくまで言語行動の地域的特徴の一側面に過ぎない。例えば、会話参加者の性質に関わる言語行動のバリエーションの考察を通して見えることとは、その地域の人々が、会話参加者の性質に応じた側面で、すなわち、主として人間関係への配慮の側面で、どのような特徴を見せるかといったものになるはずである。しかし、コミュニケーションのあり方の特徴は、人間関係への配慮の動機に特徴づけられたものがすべてではない。例えば、「コミュニケーションを楽しむ」「コミュニケーションを効率的に行う」「メッセージを強く伝える」といった動機なども考えられ、その動機の濃淡に応じて特徴づけられた地域差もあってよいはずである。

そういった点での地域差を測るには、まず、目的別の観点において、より多彩な種類の言語行動を扱う必要がある。例えば、冗談を言う、不満を言う、（返事を）保留する、疑う、気遣う、喜ぶ、言い訳するなど、これまでの主たる対人行動から漏れるその他の言語行動の多くは手つかずのままである。今後は、より多彩な言語行動を対象に全国的な調査を行い、そこから抽出される地域的特徴を洗い出していく必要がある。

とはいえ、無数ある言語行動のすべてを対象にして全国的な調査を行うのは現実的には難しい。そこで、未解明の目的別の言語行動に重心を置き、さ

らに、地域的特徴を効率よく捉える調査を行うために、これまでの言語行動の研究で明らかにされた地域差が見られる特徴を精査し、そこから抽出される観点を質問に織り交ぜた検証を行わなければならない。

例えば、これまでの研究では、場面の目的を果たすための表現様式の選択の仕方に地域差があることが指摘されている（熊谷・篠崎 2006、篠崎 2010）。表現様式の選択の仕方とは、例えば「ペン貸して／貸してくれる／貸してもらえますか／貸していただけますか」のような言語形式の選択だけでなく、「ペン貸してもらえますか」という表現を用いるにしても、「申し訳ありませんが、ペン貸してもらえますか」、「筆入れを忘れてしまったので、申し訳ありませんが、ペン貸してもらえますか」のように、どのような機能を持った要素をどう組み合わせるかという観点であり、この組み合わせの仕方の差は、言語的な配慮をどう示すかという点、言ってみれば〈配慮性〉における地域差があるということである。他の様々な言語行動でもこの〈配慮性〉の差が通底して見出せるのか、確かめる必要がある。

言語行動の分析射程に関する研究の蓄積からも、地域性を特徴づけるための観点を見出すことが出来る。特定の言語行動で選択される表現形式には、言語表現と非言語表現があり、非言語表現を伴うかといった点でも地域差がある（篠崎 1998）。さらに、その言語行動をしない（ゼロの言語行動）といった表現様式レベルにも地域差があることも明らかになっている（徳川 1985、篠崎 1996 など）。これらの指摘からは、ある場面で、伝えたいことをどれだけ言語表現以外に託すかという〈動作顕示性〉の面での地域差、そしてそもそも言語表現を使って何らかのアクションを起こすかどうかという〈発言性〉の面で地域差があり、その地域を特徴づけている可能性が見出せる。

さらに、これまでのあいさつ表現の研究からは、ある場面で交わすあいさつ表現のあり方に一定の決まり文句がある地域と、決まりきった言葉がない地域があることが明らかになっている（三井 2006 など）。これは、〈定型性〉の面での地域差と言えようが、これはどれだけ効率的にコミュニケーションを進めるかという動機などが関わった観点と捉えられる。

また、直接的な表現を好むか、間接的な表現を好むか、という面に関する地域差も存在する。真田（1983）では、本をとってもらう依頼をするとき、「本をとってくれますか」という肯定形式を使うか、「本をとってくれませんか」という否定形式を使うかの地域差を問うた結果が示されているが、この表現の選択にも地域差がある。これは、相手の意図を直接的に問う肯定形式を用いた表現を使うか、そこに否定形式を用いることで直接性を和らげ、間接性を高めた表現を使うかに差があるということである。つまり、〈間接性〉の面での地域差を観点として見出せる。

尾崎（2011）では、国内でのコミュニケーションに関する地域差の調査が行われ、様々な場面でのコミュニケーションへのあり方が問われている。その中で、電車が駅に着く前に止まってしまった時、周りの人に話しかけるかという質問で地域差があることを明らかにしている。これは、コミュニケーションへの〈積極性〉の現れ方の違いということが言える。

以上、従来の研究を総括すると、言語行動の地域差は、筆者をはじめとするいくつかの研究によって、近年盛んになってきたと言える。しかし、いまだ、どのような項目にどれくらい地域差があり、そこから抽出される観点に着目したとき、総体としてどのような地域差が描かれるのか、などが明らかになったとは言えない。ゆえに、従来の研究に指摘されてきた地域性を明らかにする一定の観点を織り込み、地域的特徴を捉えうる多彩なバリエーションの言語行動を質問項目として立て、それによって運用レベルの地域差を明らかにしていくことが求められていると言える。

本稿では、これらの課題を踏まえ、言語行動の地域差を明らかにするための第一段階の調査として、手始めに、世間で取り上げられることが多く、その意味で調査の観点の蓄積が豊富な関東地方と関西地方を対象に調査を行い、どのような言語行動にどれほど差があるかの見通しを得、言語行動の地域差を素描することを目的とする。

## 3. 調査の概要

本節では、前節までに述べた目的意識で言語行動の地域差を明らかにするために実施した調査の具体的な内容について述べる。

本研究では、アンケート調査により言語行動の地域差を明らかにする。アンケート調査の質問項目の設計にあたっては、前節までに洗い出した観点を軸に、予備調査の結果や、関東、関西出身者へのインタビューをもとに、未解明の言語行動場面を優先し、地域差が見込まれる観点を反映した質問項目を立てた。例えば、ある場面で積極的に発言するかどうかという〈発言性〉、発言が決まりきったものか具体的なものかという〈定型性〉、相手への配慮を示す言いかたをするかどうかという〈配慮性〉、目立つ動作を伴うかどうかという〈動作顕示性〉、言いたいことを直接的に言うか間接的に言うかという〈間接性〉、コミュニケーションに積極的かどうかという〈積極性〉などである。

さらに、言語行動の地域差を形成する要因としては、その地域の人々がどのように言い振る舞いをするかという点のみならず、それを支える価値観やある場面でどのような言い振る舞いを期待するかという言語行動自体への意識も重要だと考え、価値観を間接的に問うような質問や、一部の言語行動に対してどう感じるかという質問を盛り込んだ。このような観点で質問項目を立て、最終的に立てた項目は、23 項目に及んだ。

アンケートは、2014 年 7 月〜8 月に、関東と関西、それぞれの大学で主に大学生を対象に実施した。ただし、今回は収集したすべてのデータをそのまま使うわけではない。大学生を対象とする場合、個々人の持つ言語行動の特徴は、高校までで最も長く住んだ地域の特徴を反映していると考え、アンケートでは出身地域を聞いた。それぞれの出身地域別に収集したアンケートの内訳は以下の通りである。

表 2. 出身地域（高校までで最も長く住んだ地域）別の内訳

| 関西地方 | 関東地方 | その他の地域 | 全国合計 |
|---|---|---|---|
| 127 | 284 | 136 | 557 |

このうち、本稿では、一定数の量を確保できた関西地方と関東地方のデータを用いる。この 2 地域に関しては、言語行動の特徴に支えられたと見られるイメージの指摘も多く、言語行動の分析結果の検証がしやすいといった理由もある。

また、関西、関東 2 地域以外の地域（東北、中部地方）のデータ量は、相対的に少ないが、全国的の中で関西、関東の位置づけを考えるためにこれらを活用し、データとして示す。

## 4. 調査結果

本節からは、設問ごとの集計結果について概観する。まず、4.1 節で地域差が見られた項目の結果を取り上げる。続く 4.2 節では、今回の調査で地域差が出なかった項目を取り上げる。

### 4.1. 地域差が見られた項目

図 1 は、料理を褒めるときの場面で、「おいしいです」のような感想に加え、「肉が柔らかいね。」「ソースの味が絶妙だね。」など、優れている点も具体的にあげて感想を言うかどうか、を尋ねた結果である。この設問では、褒

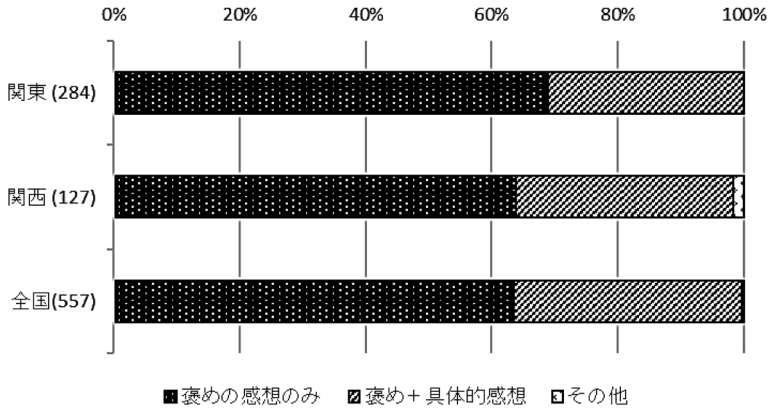


図 1. 料理を褒めるときの言語行動

めの場面での表現の、〈定型性〉を測ることになる。今回の調査結果では、関西地方より関東地方の方が「褒めの感想のみ」の割合が若干高く、関東地方より関西地方の方が「具体的な感想を添える」割合が若干高いという結果になった。「おいしいです」という表現をこの場面での定番の表現として捉えるなら、関西地方は褒めの定型の言葉に留めないという点で表現の具体性が高く、定型のみに留める関東地方の方が〈定型性〉が高いと言える。

図 2 は、友人と別れる場面で、「バイバイ」「じゃあね」「さよなら」のような定型的な言葉に加え、「気をつけて」などの気遣いの言葉を言うかどうかということを尋ねた結果である。この設問でも、別れの場面での気遣いの表現を添加するかどうかを尋ねることになり、〈配慮性〉、〈定型性〉を測ることになる。今回の調査の結果では、関西地方より関東地方の方が「定型の言葉のみ」の割合が高く、関東地方より関西地方の方が「気遣いの言葉を添える」割合が高いという結果になった。「バイバイ」「じゃあね」「さよなら」などの定型的な言葉に留める割合が高い関東地方が〈定型性〉が高く、「気をつけて」などの気遣いの言葉を添える割合が高い関西地方の方が〈配慮性〉が高いということが言える。

図 3 は、先の設問と逆に、あいさつを受ける側として友人と別れるときに

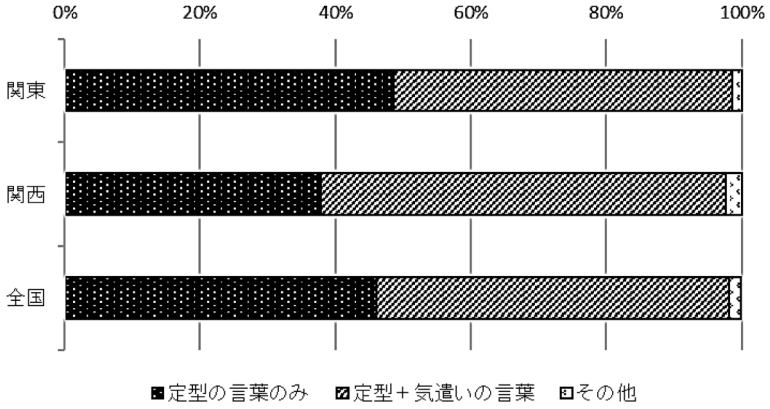


図 2.　友人と別れるときの言語行動

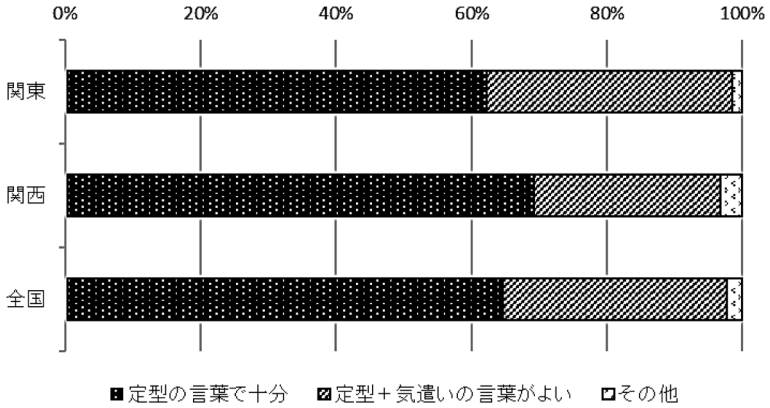


図 3. 友人と別れるときかけてほしいことば

かけてほしいことばを尋ねた結果である。この設問では、別れの場面での表現への印象を聞き、使用していることばとの意識のギャップを見ることを意図している。今回の調査の結果では、関西地方の方が関東地方よりも「定型の言葉で十分」だと思っている割合が高く、関東地方の方が関西地方よりも「「気をつけて」などの気遣いの言葉を添えてほしい」と思っている割合が高く表れている。また、全体として、「定型の言葉で十分」と思っている割合が 60％を超えているところも特徴と言える。先の設問で、別れの言葉を発する立場として、「定型＋気遣いの言葉」が 50％を超えていたことと考えあわせると、発する立場として気遣いの言葉を添えることが多いが、受ける立場としてはもっと簡単でよいと思っていることが分かる。地域別に見ると、その傾向は両回答のそれぞれの差が大きい関西地方で顕著で、関東地方はそれに比べて、発する側と受け側の意識のずれが少ないということが言える。

次頁図 4 は食事前の場面で、「いただきます」という言葉を言うかどうかに加え、手を合わせる動作を行うかどうかという非言語表現の有無を尋ねた結果である。この設問では、日常場面での儀礼的な行動を題材に〈発言性〉、〈動作顕示性〉を見ることになる。まず、「無言」、「手合わせのみ」の選択肢に関してはほとんど地域差がない。残りの選択肢では、関東地方より関西地

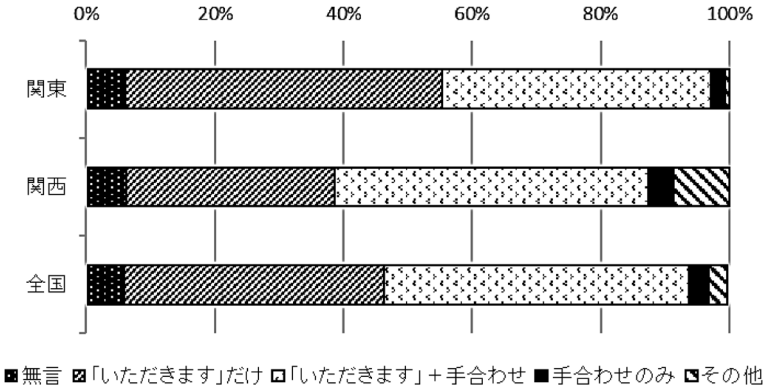


図 4.　食事前の言語行動

方の方が、「「いただきます」に加えて手を合わせる」の割合が高く、関西地方より関東地方の方が、「「いただきます」の言葉だけ」の割合が顕著に高かった。これは篠崎（1998）に沿った結果と言える。さらに、関西地方では、「その他」の回答の割合が高くなっているが、これは、1 人の時は「無言」、誰かといる場合は「「いただきます」に加えて手を合わせる」動作という回答が多く見られ、場合に応じた使い分けを意識していることが分かる。関東はこういった使い分けに関する指摘がほとんどなく、使い分け意識の有無の差が見られる。総じて、手を合わせる動作を添える割合が高い関西地方が〈動作顕示性〉が高いということが言える。

次頁図 5 は、友人が、100 円借りたことをすっかり忘れていて、返してくれないという状況での対応を尋ねた結果である。この設問では、催促の場面、相手に返却の義務がある場面での要求の表現の〈間接性〉を測ることを意図している。今回の調査の結果では、関西地方よりも関東地方の方が、「はっきり催促する」の割合がわずかに高い。さらに、「遠まわしに催促する」の割合でも、関東地方が関西地方を大きく上回っている。一方、そもそも催促をせず「放っておく」という割合は、関西地方が関東地方を大きく上回っている。

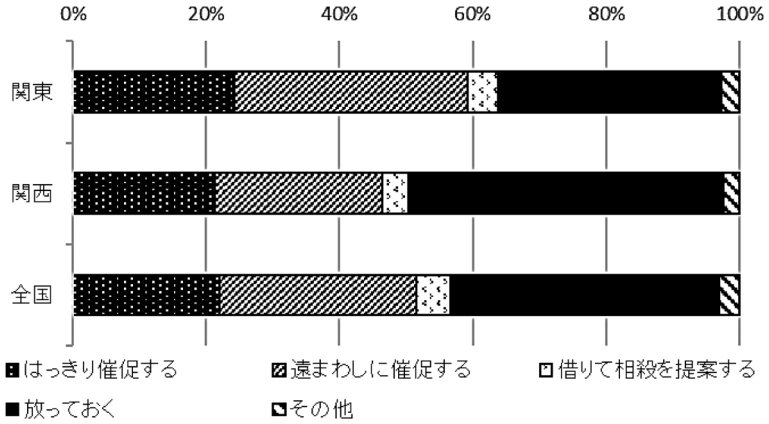


図 5. 貸した 100 円を催促するときの言語行動

一見、「はっきり催促する」の値が高い関東の方が直接的に表現する特徴を持つように見えるが、催促の回避を意味する「放っておく」を抜いて、催促の言語行動を実行する割合の中で考えた場合（「はっきり催促する」＋「遠まわしに催促する」を合わせて 100％として捉えた場合）、関西地方では、約半分（46％）が「はっきり催促する」ことになり、関東地方（40％）を上回る。よって、「遠まわしに催促する」の割合（60％）が相対的に高い関東地方の方が〈間接性〉が高いということになる。なお、「借りて相殺する」、「その他」の割合に地域差はない。

次頁図 6 は、手作りの食事が口に合わないとき、どのような対応をするかを尋ねた結果である。この設問では、否定的な感想を伝える場面での〈配慮性〉〈間接性〉のあり方を見ることを意図している。この場面で最も高い割合を示すのは、「うそでも「おいしい」と言う」という回答だが、関西地方よりも関東地方の方が顕著に高い値を示している。次に多いのは、「味以外をほめる」という回答だが、これにはほぼ地域差がない。また、「別の料理について話す」という回答も地域差は見られない。一方、「味付けを助言する」という回答の割合は、関東地方より関西地方が高い。今回の調査の結果

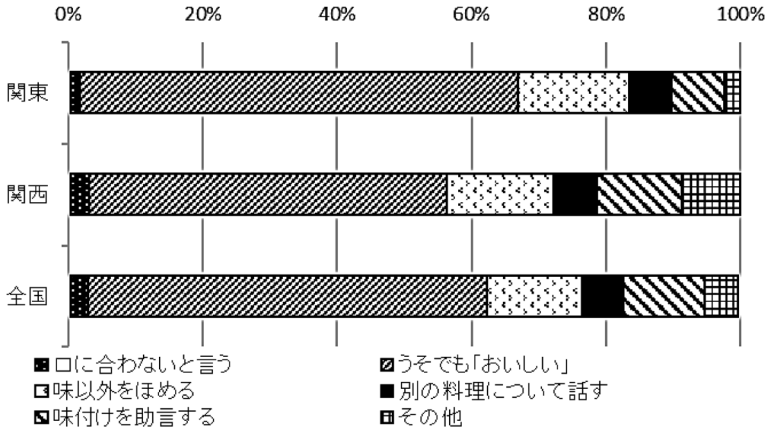


図 6. 手作りの食事が口に合わないときの言語行動

では、まず、うそでも「おいしい」という回答が多い関東地方が〈配慮性〉が高いと言え、その割合が低い関西地方は〈配慮性〉が低いと言える。

さらに、「口に合わないとはっきり言う」という回答は全国的に少なく、〈間接性〉の面で、一見地域差がないように思える。しかし、関西地方に一定数あるその他の回答の内実を見ると、「あまり好きじゃない」などという口に合わない趣旨の表現や、「一言も発さず黙々と食べる」という、料理に対しての不満が伝わる対応が回答されている。同じように、「味付けを助言する」ことにより満足していないことを具体的に伝える割合が高いという結果を加味すると、関西地方の方が、直接的に態度に表すという地域的特徴（〈間接性〉の低さ）を持っていると解せる。

次頁図 7 は、図書館で子どもが騒いでいる場面で、どのような対応をするかを尋ねた結果である。この設問では、注意の場面、相手に非があるときの働きかけの〈発言性〉、〈間接性〉、〈動作顕示性〉のあり方を見ることになる。この場面では、「無視する」の割合が最も高いが、「無視する」、「ジェスチャーで注意する」という回答に関しては地域差がほとんどない。関東地方より関西地方の方が、「言葉でしっかり注意する」割合が高い。そして、関

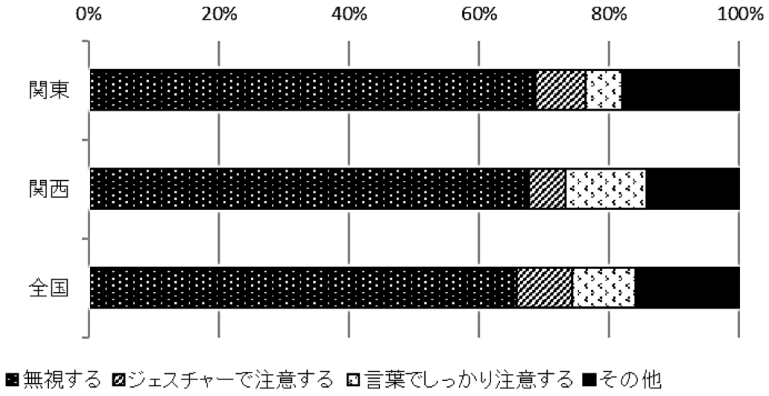


図 7. 図書館で子どもが騒いでいるときの言語行動

東地方、関西地方ともにその他の割合が高いが、その内訳で、両地域に共通して最も多かった回答が「席を移動する」というものである。次いで、「にらむ」など、視線で伝えるという回答が多く見られた。それと同じくらいの割合で、関東地方にしか見られなかった回答は、「図書館員に言う」というものである。総じて、はっきり注意する割合が相対的に低く、「図書館員に言う」などの間接的な働きかけをする回答が見られる関東地方の方が〈間接性〉が高いと言える。

次頁図 8 は、無理な頼みごとをされたときの場面で、その場ですぐにはっきりと「無理です」と断るか、「できるだけ善処してみます」と言ってその場は相手を安心させ、しばらくしてから無理だったと断るか、という断り方を尋ねた結果である。この設問では、一旦「善処します」と努力を演出し、その場で断られたときの相手の気持ちに配慮する言語行動をとるかという言語表現上の〈配慮性〉を見ている。注意したいのは、「すぐに断る」という回答も、次善の策をすぐ考えられるようにという相手を思いやる意図があるかもしれないわけで、配慮がないという意味ではない。ここで問うているのは、あくまで、その配慮を言語表現として明示するかという意味での〈配慮性〉である。結果は、関東地方より関西地方の方が、「すぐにはっきりと

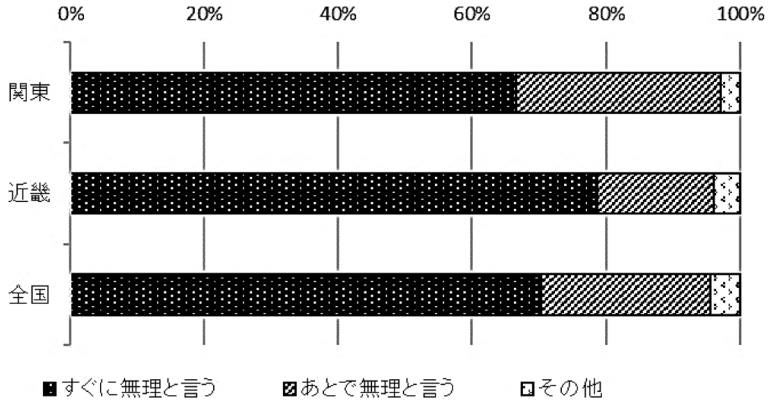


図 8. 無理な頼みごとをされたときの言語行動

「無理です」と言って断る」の割合が高く、関西地方より関東地方の方が、「その場は「できるだけ善処してみます」と言い、しばらくしてから「無理だった」と伝える」という回答の割合が高かった。すぐに断る割合が高い関西地方の方が、合理的に考えて相手の損得に配慮するのに対し、努力する姿勢を見せてから断る割合が高い関東地方は、その場を丸く収め、相手の感情に配慮するという〈配慮性〉を言語表現上で明示する点で、〈配慮性〉が高いと言える。

次頁図 9 は、友人からティッシュをもらうとき、「わるいけど、ティッシュ 1 枚もらえる？」のように、「わるいけど」のような前置き表現を添えるかを尋ねた結果である。この設問では、相手に負担となることを要求する場面での〈配慮性〉を測っている。ただし、ここではあえて最低限の負担を設定し、それでも添えるかを判定した。両地域ともに、「丁寧にしたいので添える」という回答が多数を占めるが、関東地方より関西地方の方が、「丁寧にしたいので添える」という回答の割合が高い。全国の結果と比べても、関西地方の方が、「丁寧にしたいので添える」という回答の割合が高いことから、とりわけ、関西地方がこのような場面で〈配慮性〉を示す傾向が強いということが言える。

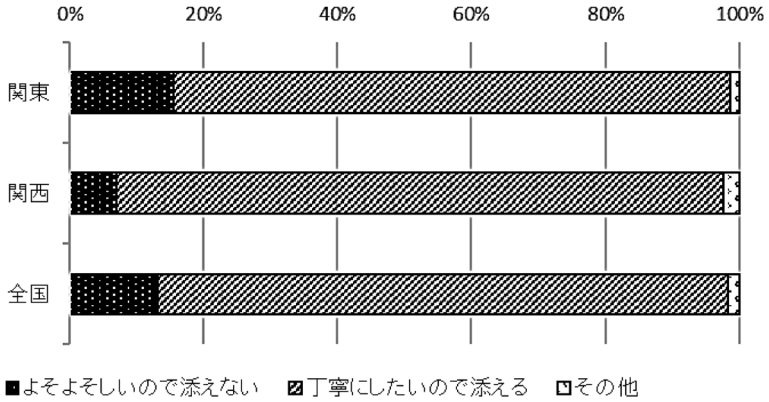


図 9. ティッシュをもらうときに前置き表現を添えるか

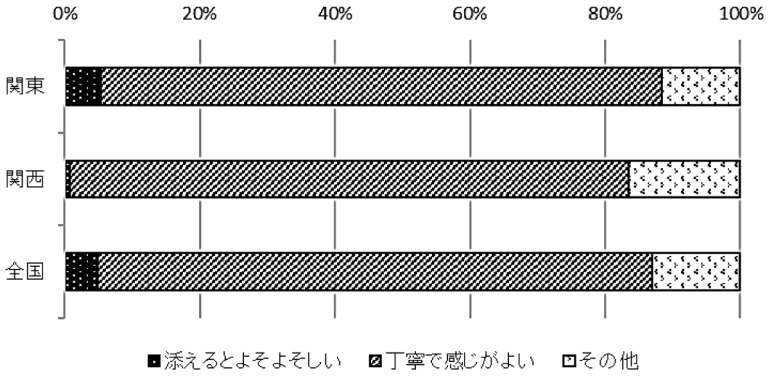


図 10. 友人がティッシュをもらうときに前置き表現をつけて聞いてきたときの印象

図 10 は、友人が自分からティッシュをもらうとき、「わるいけど、ティッシュ 1 枚もらえる？」のように、「わるいけど」のような前置き表現を添えてきたときの印象を尋ねた結果である。この設問では、要求の場面での前置き表現の印象を聞いている。丁寧で感じがよいという回答が大多数を占め、その割合にはほとんど地域差がない。関東地方では、「添えるとよそよそしい」が若干あり、関西地方にはほとんどない。さらに、両地域で「その他」が一定数見られるが、このほとんどが、「それが当然」、「特に何も感じない」

というものである。つまり、前置き表現を添えるのが常態だと感じる割合を示しており、その割合は関西地方の方が多いということを意味している。前問の結果と考えあわせると、関西地方は、お願いするときに丁寧にしたいので前置き表現を添える割合が多く、そして、それを丁寧ないし当たり前のものとして受け止めており、関東地方も同じように前置き表現を添え、それを丁寧ないし当たり前のものとして受け止めている割合が多いということが明らかになった。ただし、関東地方では、「よそよそしいので前置き表現を添えない」という回答と、「添えられるとよそよそしく感じる」という回答が、わずかながら関西地方より多いということも分かった。

図 11 は、前を歩いていた人（初老の女性）が落としたハンカチに気づいたときの対応を尋ねた結果である。この設問では、注意喚起の場面における呼びかけの〈間接性〉、〈配慮性〉を見ることになる。「「おばあちゃん」などの呼称で呼ぶ」、「気づかないふりをする」といった回答は少なく、地域差がない。その場にせよ、近づいてにせよ、関東地方では「「すみません」という呼びかけをする」回答の割合が高い。関西地方では、「近づいて「落としましたよ」と言って差し出す」の割合が高く、はっきりと落としたことを指

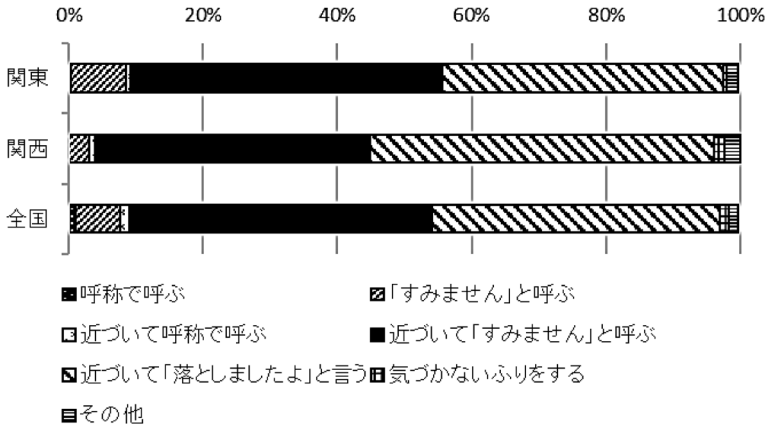


図 11. 前を行く人がハンカチを落としたときの言語行動

摘して示す傾向が強い。総じて、わざわざ近づいて声をかける割合が高い関西地方の方が〈配慮性〉が高く、近づいて直接声をかけたり、相手を特定する呼称で呼んだりせず、「すみません」と呼びかけて気づいてから用件を言う割合が高い関東地方の方が〈間接性〉が高いと言える。

図 12 は、言葉が通じない外国人に道を聞かれたときの場面で、どのような対応をするかを尋ねた結果である。この設問では、道尋ねの場面での人助けへの積極性や、人助けのときの説明の指向性（メッセージを伝えようとするか行動で示すか)、メッセージを伝えるときの〈動作顕示性〉を見ることを意図している。今回の調査結果では、「身振りのみ」以降の回答に関してはほとんど地域差がない。大きく、「日本語に身振りを交えて説明する」か、「目的地まで連れ添う」に分かれ、関東地方では、日本語と身振りで何とかメッセージを伝えようとする説明重視の割合が多く、関西地方では目的地まで連れ添うという行動重視の割合が多いという結果になった。

次頁図 13 は、自動販売機でジュースを買ったところ、親しげな電子音声で「ありがとう」と言われたときの対応を尋ねた結果である。この設問では、独話場面で思ったことを口に出す心情表出の〈発言性〉の強さを見るこ

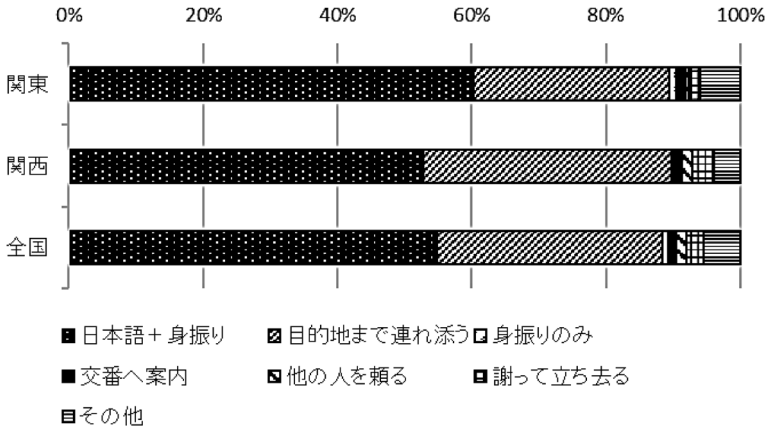


図 12. 言葉が通じない外国人に道を聞かれたときの言語行動

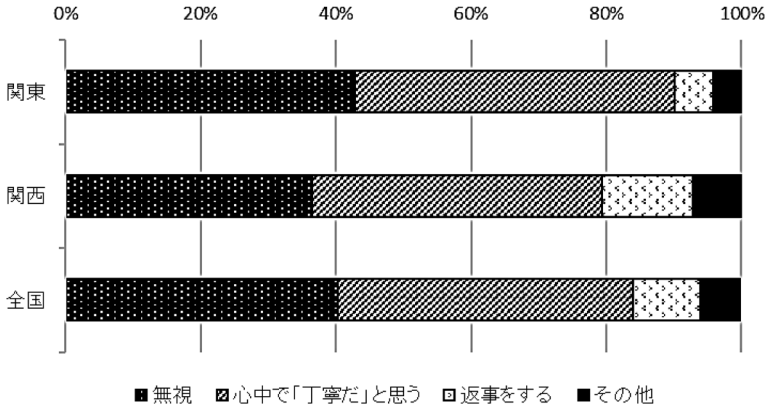


図 13. 自動販売機に感謝の声をかけられたときの言語行動

とを意図した。今回の調査結果では、関西地方より関東地方の方が、「無視をする」割合が高い。「心中で反応する」ないし「返事をする」という回答が、反応を示したものとして設定した選択肢だが、一定数見られるその他の回答の内訳を見ると、いずれも「驚く」「会釈する」「笑う」などの反応を示す回答であり、これらも加えた何らかの反応を示す回答の総体と捉えるべきだと言える。これらを合わせた割合で比べると、関東地方より関西地方の方が何らかの反応を示す割合が高い。さらにその反応を口に出すかという点においても、関東地方より関西地方の方が返事をする割合が高く、〈発言性〉が強いと言える。

次頁図 14 は、初めて行くレストランで、会計するときの対応を尋ねた結果である。この設問では、初訪問の店を出る場面で帰り際に言葉をかけるかという〈発言性〉や、かけるなら定型的な言葉に留めるか、気遣いの表現を添加するかという〈定型性〉、〈配慮性〉のあり方を見ることを意図した。どの地域でも「「ごちそうさま」のみ」という回答が最も多く、その地域ごとの割合では、関西地方より関東地方の方が高い。一方、それに次ぐ「無言で会計する」の割合は、関東地方より関西地方の方が高い。関西地方は全国平均に比べても「無言で会計する」の割合が高い。一方、「「ごちそうさま」に

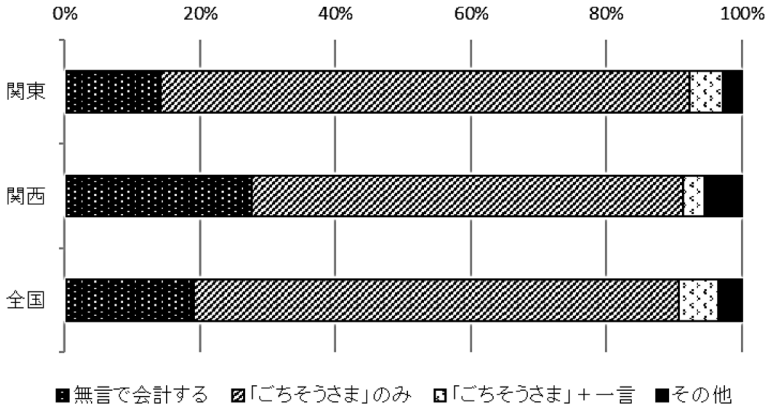


図 14.　初めて行くレストランで会計のときの言語行動

加え、「おいしかった。また来るよ。」などと声をかける」という回答の割合は少なく、地域差も窺えない。また、「その他」の回答は、両地域とも、ほぼ「ありがとう」と言うというものであり、差は見られなかった。よって、この場面に関しては、関東地方が〈発言性〉が強く、発言したときの表現の〈定型性〉が高く、関西地方は〈発言性〉が弱いということが言える。

次頁図 15 は、同性の友人と TV を見ていて、友人が盛んに話しかけてきたときの対応の仕方を尋ねた結果である。この設問では、コミュニケーションを通した親和が目的である交感的コミュニケーションの場面での〈積極性〉や、非積極的反応を選んだときの表現の〈配慮性〉、〈間接性〉を見ることを意図した。「無視する」、「理由を言って止めさせる」、「「うるさい」といって止めさせる」、といった否定的な反応を示す回答はほとんどなく、地域差もない。大きく、「最小限の返事をする」か、「話に乗る」という回答に分かれ、関東地方より関西地方の方が、「話に乗る」という割合が高く、関西地方より関東地方の方が、「最小限の返事」に留める割合が高かった。全国の結果と照らし合わせると、関西地方が、「話に乗る」の割合が高く、交感的コミュニケーションへの〈積極性〉が高いということが分かる。

次頁図 16 は、一人でスーパーに買い物に行き、お店の品の値札を見る

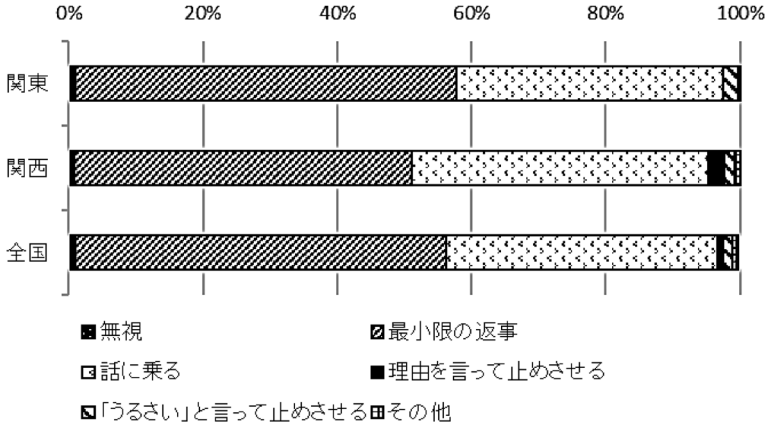


図 15. テレビを一緒に見ていて話しかけられたときの言語行動

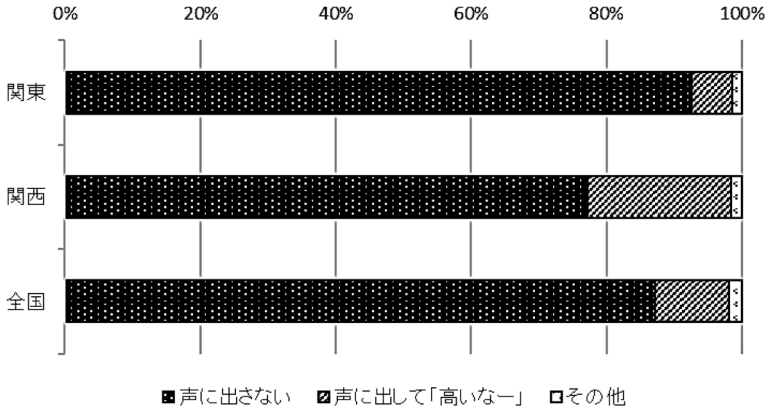


図 16. スーパーで予想以上に品が高かったときの言語行動

と、予想以上に高い値段だったときの反応を尋ねた結果である。この設問では、独話場面での驚きの心情表出の〈発言性〉の強さを見ている。最も多い回答は、「「高いなー」と心中で思い、声に出さない」というものだが、関西地方より関東地方の方がその割合が高く、関東地方ではほとんど声に出さないことが分かる。一方、関西地方では、「声に出して「高いなー」」と言う回

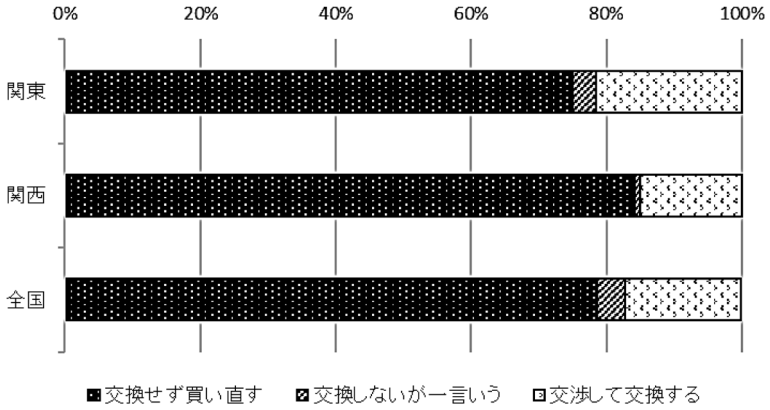


図 17. 間違ったサイズの電池を買ってきてしまったときの言語行動

答の割合が、関東地方や全国平均に比べても高い。ここから、とりわけ関西地方が驚きの場面での〈発言性〉が高いということが言える。

図 17 は、電池を買って来たら自分で考えていたのと大きさが違っていたときのその後のお店への対応を尋ねた結果である。この設問では、自分に非がある状況の交渉場面で、非義務的な交換要求をするかどうかという観点で〈発言性〉を見ている。最も多い回答は、「交換せず買い直す」というものだが、関東地方よりも関西地方の方がその割合が高い。関東地方では、その分、「交渉しないが一言いう」、「交渉して交換する」という回答の割合が高い。〈発言性〉の面で言えば、交渉をせずに買い直す割合が高い関西地方が〈発言性〉が弱く、交渉する、ないし一言いう割合が高い関東地方が〈発言性〉が強いと解せる。例えば、値引きの交渉は、関西地方を中心にした地域でよく見られると指摘されるが（小林・澤村 2014 など）、同じ交渉でも、自分の過失で交換を求めるようなときの交渉は、関西地方で少なく、むしろ関東地方の方が多いという傾向が見られた。

次頁図 18 は、出会い時のあいさつの声かけのタイミングについての意識を尋ねた結果である。この設問では、日常の儀礼的な行動（出会いのあいさつ場面）における先後意識の有無を見ている。最も多い回答は、「上下に関

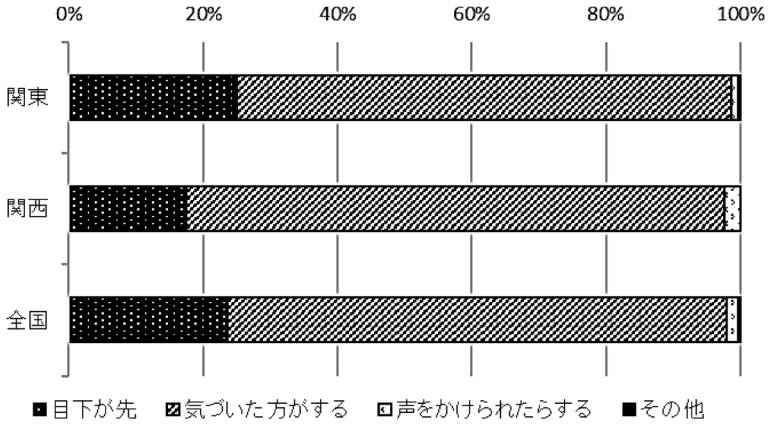


図 18. あいさつの声かけのタイミング

わらず、気づいたほうが声をかければよい」というもので、関東地方より関西地方の方がその割合が高い。一方、「目下のものが先に声をかけるべき」という回答は、関西地方より関東地方の方が高い。あいさつの先後については、戦後まもなくの時期に、それまでの封建的秩序意識からの変化に伴い、上下意識との関わりが意識に上ることがあったことが窺われるが（川島 1951）、その後、詳しい調査をしたものは、管見の限り見当たらない。このような観点での先後に関する意味づけや、それに地域差があることが分かれば、あいさつ表現における言語表現の位置づけを再検討する材料にもなりうる。今後、地域を拡大しての検証が求められる。

次頁図 19 は、友人とのおしゃべりの場面で、友人が、自分が買った高い服について自慢をしてきたとき、それについてどう感じるかを尋ねた結果である。この設問では、高いものを自慢するという言語行動への許容度と価値観の差を尋ねている。最も多く選ばれた回答は、「単純に羨ましいと思う」という回答で、その割合は関西地方より関東地方の方が高い。それと反対に、「高いものを自慢する理由が分からない」と否定的に捉える人の割合は、選択肢全体の中で占める割合こそ多くないが、地域差の点では関東地方より

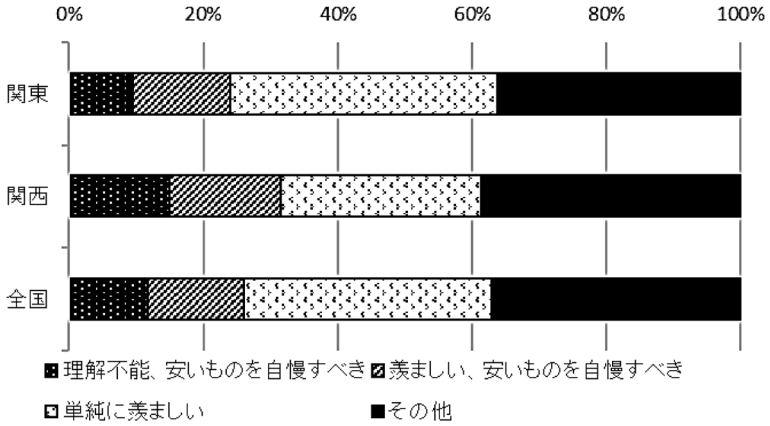


図 19. 友人が高い服を自慢してきたときの印象

関西地方が高い。そして、「高いものを買ってうらやましいが、自分だったら安いものを自慢する」という、許容しつつも反対の価値観を占めす回答の割合は、両地域で一定程度あるが地域差はない。さらに、この設問では、「その他」が多く回答された。その内訳で最も多かった回答は「何とも思わない」などという無関心の姿勢を示す回答であり、それぞれ、関西地方で全体の 28%、関東地方で 25%と大きな比重を占めている。こういった傾向は、人間関係を円滑に保つために、他人は他人、自分は自分と割り切り、価値観の衝突を避ける心理の表れと捉えられるかもしれない。

次頁図 20 は、周りに誰もいない状況で重いものを持ち上げるとき、力を入れるための発声をするかどうかを尋ねた結果である。この設問では、独話場面で力をこめたときの心情表出の〈発言性〉を見ている。最も多い回答は「「よっこいしょ」などのかけ声を言う」、次いで「「んんん」「うーん」などの力み声を出す」というものだが、若干関西地方が関東地方を上回るものの、これらの回答の割合に大きな地域差はない。「無言」の割合は、関東地方が関西地方よりも多い。総合して見ると、何らかの声を出す割合が高い関西地方の方が〈発言性〉が高い可能性がある。

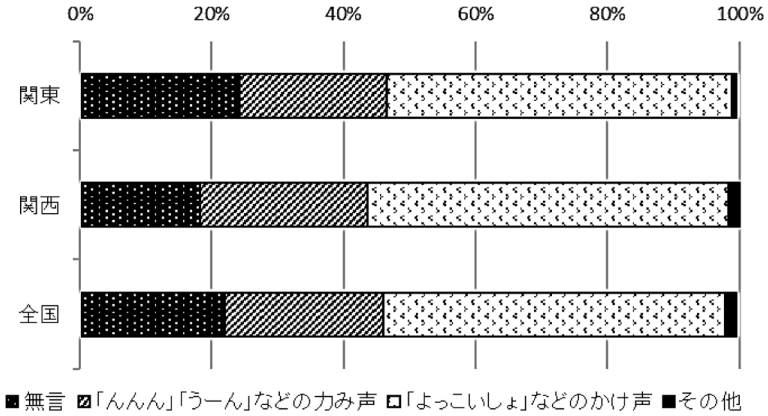


図 20. 重いものを持ち上げるときの言語行動

### 4.2. 地域差が見られなかった項目

次頁図 21 は、初めて訪れたレストランで頼んだものと違う料理が出てきたときの対応を尋ねた結果である。この設問では、先方に過失がある場面での交換交渉の〈配慮性〉を見ることになる。この場面では、「何も言わず食べる」が最も多く回答され、次いで、「一言文句を言う」、「作り直させる」という順になっており、それぞれの回答の割合にほとんど地域差がない。

次頁図 22 は、新幹線で同年代くらいの同性の人が隣の席に座ったときの対応を尋ねた結果である。この設問では、見知らぬ人という疎の相手との交感的コミュニケーションへの〈積極性〉を見ることを意図した。しかし、「話しかけない」の回答が大半を占め、今回調べた対象では大きな地域差が見られなかった。尾崎（2011）では、東京と西日本（名古屋・大阪・広島・福岡）で差が出ているので、今回の調査結果で予想した結果が出なかったのは設問の場面設定の問題と考えられる。今後、設定の調整を要する項目と言える。

次頁図 23 は、休日に待ち合わせをしていて、偶然、学校の親しい友人と会ったが、その友人が簡単な挨拶をして立ち去ったとき、その対応への印象を尋ねた結果である。この設問では、親しい友人に期待する交感的コミュニケーションのあり方を見ることを意図した。最も多い回答は、「簡単なあいさ

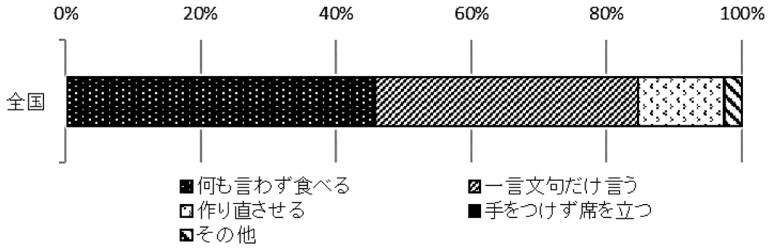


図 21. 頼んだものと違う料理が出てきたときの言語行動

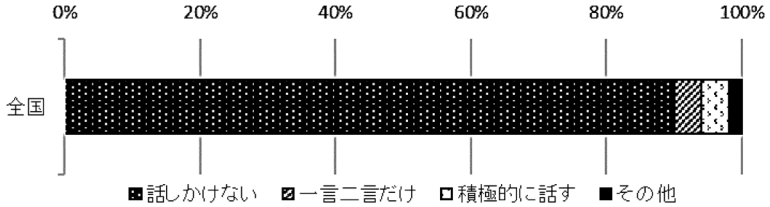


図 22. 新幹線で隣に同年代・同性の人が座ったときの言語行動

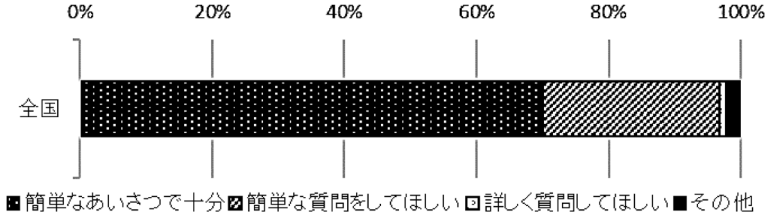


図 23. 休日、学校の友人と偶然出会ったときに相手に期待する言語行動

つで十分」というもので、次いで「簡単な質問をしてほしい」という回答だった。そして、今回の調査の範囲では、回答傾向に地域差は見られなかった。

## 5. 言語行動の総体的地域差に関する考察

以上、4 節で、それぞれの調査項目に関する分析結果を概観した。中には、当初予測したような結果が得られなかったものもあったが、本節では、それぞれの項目から見出せる特徴を総合し、関東地方と関西地方の言語行動

における地域的特徴を素描する試みを行いたい。なお、今回の調査はあくまで準備調査であり、本来ならデータの地域的偏りを失くした上での試みが求められる。しかし、今回の結果は、概ね、当初の予測に沿うような結果が得られ、質的にも、地域的特徴を素描する試みに耐えるものと判断したので、今後の言語行動の地域差研究の方向性を示すという意味でも、本節で総体を比較する取り組みを行う次第である。

それぞれの調査項目について〈発言性〉などの観点にもとづいて分析してきたが、その優劣を観点ごとに整理し、それぞれの地域の総合的特徴を描いたものが次頁表3である。

縦軸には今回調査した項目で焦点となる言語行動の名称を並べた。その際、同種の言語行動としてまとめられるものには、同一の名称を施した。例えば、自動販売機に対する返答や、スーパーでの買い物時の驚き、荷物持ち上げ時の力こめは、いずれも一人の場面での心情を口に出して発言する言語行動として括ることができ、それを「心情表出」と名付けるといった具合である。

それぞれの名称に（　）で併記したものは、その言語行動が行われる場面である。また、同種の言語行動で、対象の親疎を違えて質問した場合、【親】【疎】のように示してある。横軸には、関西地方、関東地方、それぞれの地域ごとに、今回の調査でターゲットとした観点を並べている。言語行動ごとに、他地域（全国平均も含む）に比べて優勢なものに「＋」、劣勢なものに「－」を付けて示した。なお、関西、関東、それぞれの観点の枠から外れた「質的な差」というのは、地域ごとの指向性の差などが見られた時に「＋」として示した。そして、今回の調査において、何らかの差が見られなかった項目は灰色で塗りつぶしてある。最右列には、本稿における図番号を示した。表の「＋」「－」の付き方に沿って整理しているので、図番号の順番通りにはなっていない。

まず、全体的な傾向について見ると、関西地方は、〈配慮性〉の面において、関東地方に比べて優位な傾向を見せており、〈動作顕示性〉、〈積極性〉

表 3. 言語行動の地理的変異モデル試論

| 焦点となる言語行動 | 関西 | | | | | | 関東 | | | | | | 質的な差 | 図の番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 発言 | 定型 | 配慮 | 動作 | 間接 | 積極 | 発言 | 定型 | 配慮 | 動作 | 間接 | 積極 | | |
| 心情表出（返答） | ＋ | | | | | | | | | | | | | 13 |
| 心情表出（驚き） | ＋ | | | | | | | | | | | | | 16 |
| 心情表出（力こめ） | ＋ | | | | | | | | | | | | | 20 |
| 交換要求（交渉） | － | | | | | | ＋ | | | | | | | 17 |
| 気遣い添加（別れ【疎】） | － | | | | | | ＋ | ＋ | | | | | | 14 |
| 具体的感想添加（褒め） | | | | | | | | ＋ | | | | | | 1 |
| 気遣い添加（別れ【親】） | | | ＋ | | | | | ＋ | | | | | | 2 |
| 呼びかけ（注意喚起） | | | ＋ | | | | | | | | ＋ | | | 11 |
| 気遣い添加（要求） | | | ＋ | | | | | | | | | | | 9 |
| 努力演出（断り） | | | | | | | | | ＋ | | | | | 8 |
| 儀礼的行動（食前） | | | | ＋ | | | | | | | | | | 4 |
| 催促 | | | | | － | | | | | | ＋ | | | 5 |
| 否定的感想伝達 | | | － | | － | | | | ＋ | | ＋ | | | 6 |
| 注意 | | | | | － | | | | | | ＋ | | | 7 |
| 交感的コミュニケーション【親】 | | | | | | ＋ | | | | | | | | 15 |
| 気遣い添加の印象（別れ【親】） | | | | | | | | | | | | | ＋ | 3 |
| 気遣い添加の印象（要求） | | | | | | | | | | | | | ＋ | 10 |
| 説明指向（道尋ね） | | | | | | | | | | | | | ＋ | 12 |
| 儀礼的行動順（出会い） | | | | | | | | | | | | | ＋ | 18 |
| 自慢の印象 | | | | | | | | | | | | | ＋ | 19 |
| 交換要求（相手過失時交渉） | | | | | | | | | | | | | | 21 |
| 交感的コミュニケーション【疎】 | | | | | | | | | | | | | | 22 |
| 交感的コミュニケーション【親】の印象 | | | | | | | | | | | | | | 23 |

の面でもわずかに優位である。一方、〈間接性〉においては、「－」が多いが、これは間接的ではなく、むしろ直接的ととれる特徴があることを示している。

関東地方では、〈間接性〉、〈定型性〉において特に優位な傾向を見せており、〈配慮性〉についても相対的にやや優位な傾向を見せる面がある。

さらに、両地域ともに〈発言性〉の面でいくつか優位さを示しているが、注目すべきはその内実が異なることである。関西地方で優位なのは、心情表出の言語行動だけであり、交渉場面の「交換要求」や初訪問の店を出る場面の「気遣い添加」では、むしろ関東地方が〈発言性〉が強く、関西地方では〈発言性〉が弱い。この強弱の場面の差は、独話場面か否かという点である。つまり、ここでは、一地域内でも〈発言性〉の強さに強弱があり、それを統

制する一定の場面的条件があることが窺える。すなわち、本データから言えることは、〈発言性〉の観点一つとっても、一口に「○○地方は〈発言性〉が高い」と言い切るのは難しく、このような一つ一つの言語行動の地域差の実態を積み重ね、その実態から先に洗い出した「独話場面」など、より大きなレベルでの共通性を見出し、その場面的条件と観点ごとの関係を地域ごとの特徴として描き出していくことが、地域的特徴を正確に見極めるための確実な方法だということである。

加えて、こういった視座で見ると、他にも見えてくる特徴がある。関東地方では、「注意喚起」「催促」「否定的感想伝達」「注意」の場面で〈間接性〉が優位であり、これらの場面に共通する特徴を取り出すならば、相手の面子をつぶす可能性があるような場面で〈間接性〉の高い言語行動を選択するという傾向があると言える。一方、関西地方ではそのような場面で、〈間接性〉が高い言語行動を選択するどころか、むしろ直接的な言語行動を選択するという特徴があると言える。

ただし、今回の結果は、あくまで関西地方と関東地方を相対的に比べた結果である。地域を広げれば、相対的に、これらの地方それぞれの結果がもっと際立ったり、薄まったりすることが考えられる。さらに、言語行動の調査項目もまだ十分とは言えず、先に示した「大きな場面枠」というのも、その意味で暫定的なもので、今後、項目を増やすことで変動する可能性がある。地域的特徴を見出すための観点の内実、調査対象の範囲（年代）でも十分とは言えない。

ただし、そういった十分でない点を差し引いて考えても、今回、見出した考察の結果は、世間一般に流布する、それぞれの地域の地域イメージから類推される行動パターンと大きくかけ離れたものではないだろう。そういった点から考えても、このような手法で、言語行動の地域差の実態に迫る手法に、一定の可能性が見出せるということが言える。つまり、本稿の最大の意義は、試論とはいえ、このような手法を以て、言語行動の地域差を導出するための一つの方向性を示すことができたということである。

## 6. 結論

本稿では、言語行動の地域差を明らかにするために、関東地方と関西地方を対象に調査を行い、言語行動の地域差を素描することを目的とした。調査の結果の分析から、次のような結果を導いた。

・関西地方は、〈配慮性〉の面において、関東地方に比べて優位な傾向を見せており、〈動作顕示性〉、〈積極性〉の面でもわずかに優位である。一方、〈間接性〉においては、むしろ直接的ととれる特徴がある。

・関東地方では、〈間接性〉、〈定型性〉において特に優位な傾向を見せており、〈配慮性〉についてもやや優位な傾向を見せる。

・関東、関西両地域ともに〈発言性〉の面での優位さがあるが、関西地方は独話場面での〈発言性〉の優位さという特徴がある。

・関東地方では、相手の面子をつぶす可能性があるような場面で〈間接性〉の高い言語行動を選択し、関西地方ではそれとは対称的に直接的な言語行動を選択する。

そしてこのような手法で言語行動の地域差を描くことで、多彩な言語行動の調査への着手、観点ごとの特徴づけ、ボトムアップでの言語行動の場面枠ごとの特徴の洗い出しを行い、今後、言語行動の地域差を導出するための一つの方向性を示すことができた。

今後の課題としては、準備調査の結果をもとに調査項目を洗練し、より地域差が顕著に見られる項目を設定して調査を行うこと、若年層のみならない他世代の調査を行い、世代ごとの地域差を明らかにすること、対象地域を全国に拡大して調査を実施すること、言語行動の地域差を生む背景を明らかにするための意識調査を行うことなどが挙げられる。

これらの課題にはすでに着手し、全国的な地域差を明らかにする調査を実施しており、順次成果を示していく予定である。

## 参考文献

尾崎喜光（2011）『国内地域間コミュニケーション・ギャップの研究―関西方言と他方言の対照研究』科学研究費補助金成果報告書
川島次郎（1951）「挨拶は、上からか、下からか―新しい礼法への希求」『弘道』60（664）: pp. 34–35. 日本弘道會事務所
岸江信介（2009）「注意喚起時における言語行動の地域差と場面差―テキストマイニングによる分析を中心に」『月刊言語』38(4): pp. 24–31. 大修館書店
熊谷智子・篠崎晃一（2006）「第 3 章依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』pp. 19–54. くろしお出版
国立国語研究所（1984）『言語行動における日独比較』三省堂
小林隆・内間早俊・坂喜美佳・佐藤亜実（2014）「言語行動の枠組みに基づく方言会話記録の試み」『東北文化研究室紀要』55: pp. 1–35. 東北大学大学院文学研究科東北文化研究室
小林隆・内間早俊・坂喜美佳・佐藤亜実（2015）「第四章　言語生活の記録―生活を伝える方言会話集―」大野眞男・小林隆編『方言を伝える 3・11 東日本大震災被災地における取り組み』pp. 89–116. ひつじ書房
小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』岩波新書
篠崎晃一（1996）「家庭におけるあいさつ行動の地域差」言語学林 1995–1996 編集委員会編『言語学林 1995–1996』pp. 547–558. 三省堂
篠崎晃一（1998）「気づかない方言 12 気づかない挨拶行動」『日本語学』17(4): pp. 93–95. 明治書院
篠崎晃一（2002）「言語行動の方言学」日本方言研究会編『21 世紀の方言学』pp. 226–234. 国書刊行会
篠崎晃一（2010）「働きかけ方の地域差」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見―知られざる地域差を知る』pp. 107–118. ひつじ書房
篠崎晃一・小林隆（1997）「買物における挨拶行動の地域差と世代差」『日本語科学』2: pp. 81–101. 国書刊行会
東北大学方言研究センター（2014）『生活を伝える被災地方言会話集―宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話―』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
東北大学方言研究センター（2015）『生活を伝える被災地方言会話集 2―宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話―』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
東北大学方言研究センター（2016）『生活を伝える被災地方言会話集 3―宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話―』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
徳川宗賢（1985）「日本の風土性」九学会連合日本の風土調査委員会編『日本の風土』pp. 51–70. 弘文堂
中西太郎（2015）「コミュニケーション・ギャップの一因としてのことばの地域差」『応用言語学研究』17: pp. 9–15. 明海大学大学院応用言語学研究科紀要編集委員会
西尾純二（2008）「言語行動の多様性に関する研究の射程」山口幸洋博士の古希をお祝いする会編『方言研究の前衛』pp. 161–177. 桂書房
西尾純二（2009）「再検討・日本語行動の地域性」『月刊言語』38(4): pp. 8–15. 大修館書店
日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 7 第 12 部談話第 13 部待遇表現』く

ろしお出版
野田尚史・高山善行・小林隆編（2014）『日本語配慮表現の多様性―歴史的変化と地理的・社会的変異』くろしお出版
三井はるみ（2006）「おはようございます、こんばんは」『月刊言語』35(12): pp. 80–83. 大修館書店

## 参考 URL

社団法人大阪アドバタイジングエージェンシーズ協会（2006）『「大阪人と東京人の行動比較調査」結果報告書』（http://ur0.work/z9T0 より）

## 付記

本稿は、平成 27 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号 15K02576）の研究成果を利用している。
なお、関西でのアンケート実施にあたっては天理大学、鳥谷善史氏の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

キーワード
言語行動、地域差、地域イメージ、東西差